

# 利尻島の海岸部における冬期の鳥類相

小杉 和 樹

## はじめに

利尻島の冬は強い北西の季節風が吹き、海上も大荒れになることが多く、非常に自然環境の厳しい季節である。しかし、北海道本土の内陸部と比べると、利尻島周辺の海域を流れる対馬暖流の影響を強く受けることから、大幅に酷寒は和らげられ、積雪量も多くはない。また、利尻島の位置が日本海側にあることから流氷が海岸を取り囲むことは珍しい。このため冬期の海岸部では、海鳥を中心とした鳥類やゴマフアザラシ、トドといった海獣類も数は少ないが見ることができ、特に鳥類は越冬種も多く鳥類相が豊富な地域となっている。

海岸及び洋上の鳥類については、「利尻島の鳥」(小杉1988)で概略を報告しているが、ここでは海岸部の冬期におけるより具体的な鳥類について報告する。

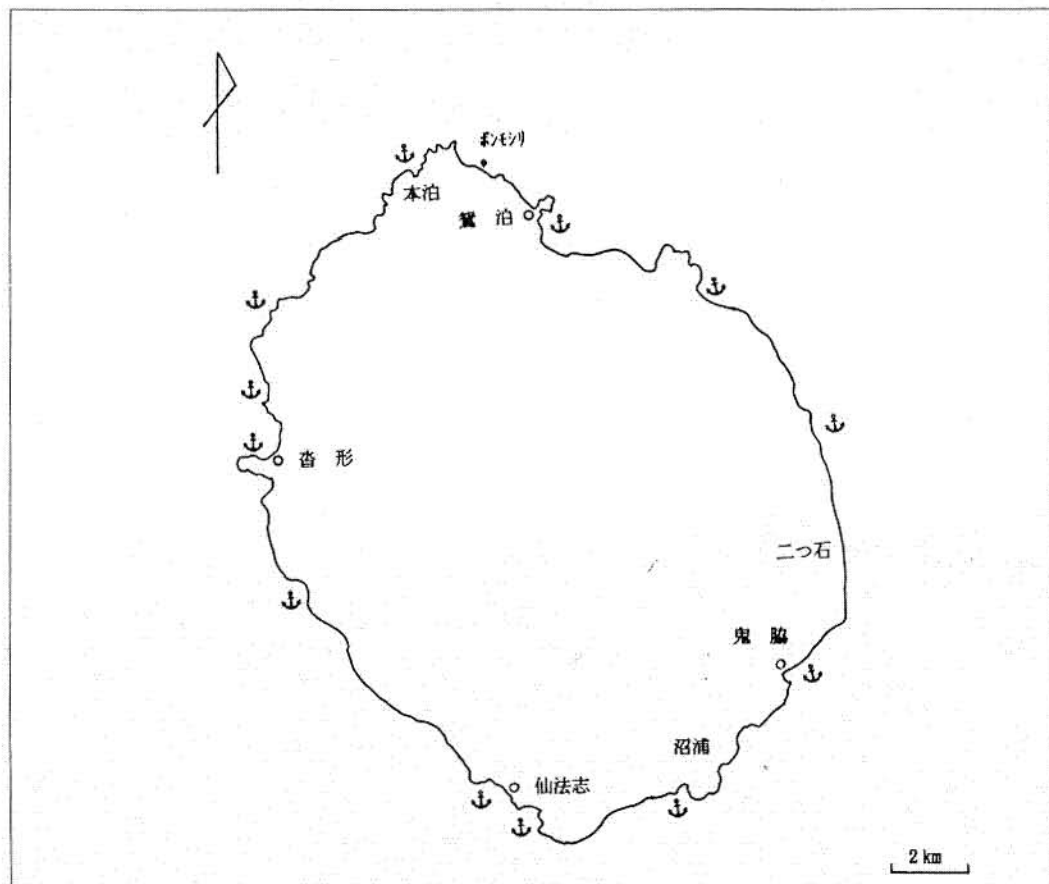


図1. 利尻島の概略

Fig. 1. Map of Rishiri Island

### 調査地と方法

調査地は、利尻島海岸線全域の、岸から概ね500m程沖合までの地域である。海岸線の延長は63.3kmあり、その大部分は利尻島を環状する道路と接近しており、北東部～西部、南部～南東部にかけて岩礁浜、西部～南部、北東部～南東部にかけては転石浜を中心に形成され、小規模な砂浜が南東部沼浦地区と北西部本泊地区に見られる。しかし、実際には岩礁浜に転石浜が混じって形成されていることもあり複雑であるが、岩礁浜が多く見られる。また、海岸線の各所には漁港を中心とした港が12箇所設けられており(図1)、近年は護岸工事や海岸保全のためコンクリート製の消波ブロックが岸に積まれている海岸等もあって変化に富んでいる。

調査は、1986年12月～1989年12月までの随時の観察と1989年12月31日、1990年1月2日～4日に4回の個体数についての調査を行った。調査はラインセンサスに準じ、午前11時～午後3時まで島内を一周し、調査地内で出現した種と個体数を記録した。また、調査日は気象条件が同一となるよう配慮した結果である。ただし、大型カモメ3種については時間の制約があって1990. 1. 4のみになった。

なお、冬期とした期間は厳冬期を中心に11月中旬から翌3月中旬までである。



写真1、岩礁の上で休む海獣類(1990, 2月中旬 蘭泊地区)

海上が穏かな時には、このように岸近くの岩礁の上で、のんびりと日なたぼっこをしているのが観察される。海をへだてているせいか、近づいても逃げる気配はない。

## 結果及び考察

これまでに冬期の海岸部で観察された鳥類は9科33種である(表1)。これは、利尻島の冬期における鳥類の80%を占めるものである。これらのうち、海岸部での鳥類相において主要な構成群を占めているのは、ヒメウ、シノリガモ、オオセグロカモメの3種である(表2)。

特にオオセグロカモメは、周年観察される海鳥のなかで唯一利尻島で繁殖する種であり(西谷・小杉1988)、夏期の個体数も多い。1990年1月4日の調査日には378羽しか観察されなかったが、1990年1月15日に水産加工場の廃液が流出する付近で1,500羽程度のシロカモメ、ワシカモメが混じった群れも含めて1,967羽を観察した。この違いは調査日が正月期間で水産加工場が休業していたために因るものと思われ、カモメ類への人的影響が大きいことを伺わせる現象である。群れの中には、1年目及び2年目若鳥も多く含まれている。

ヒメウも周年観察され、冬期にその数を増やすが夏期には著しく減少する。一方、ヒメウ同様周年観察されるウミウは夏期に数は多いものの、冬期にその数は著しく減少し、観察される個体も若鳥が多い。どちらの種も利尻島での繁殖は確認されていない。ヒメウについては1989年1月16日にも同様のセンサスを行っており、比較した結果個体数791羽とほぼ同数であったが、出現地区がそ

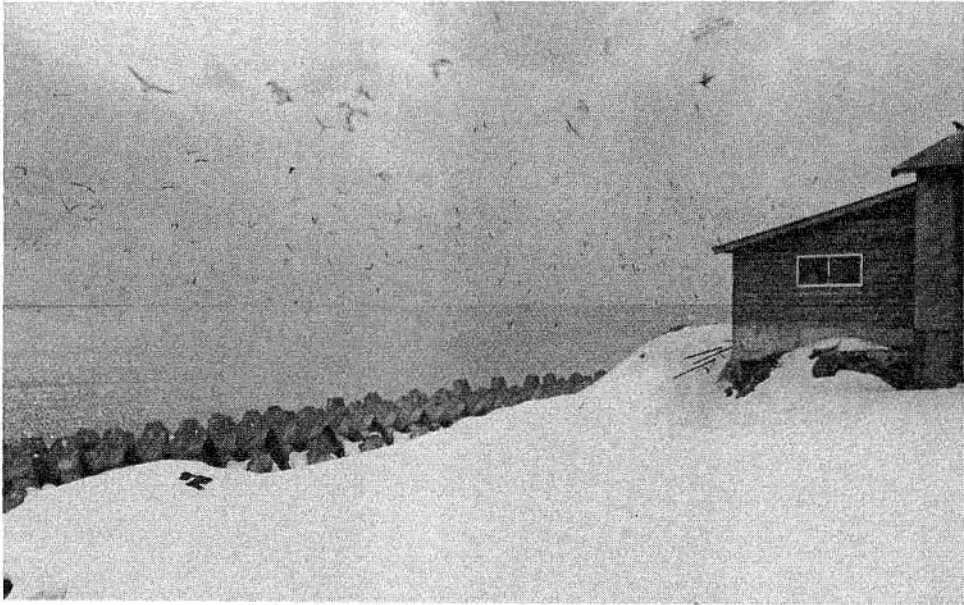


写真2、水産加工場の廃液に集まるカモメ類(1990、2月中旬長浜地区)

水産加工場が操業している限り、その廃液の中の魚類の臓物を貧欲に、大型カモメ類が採食している。利尻島には、写真の長浜地区と雄志志内地区にある加工場で、このような群れが観察される。

表1. 利尻島の海岸部における冬期の鳥類リスト  
Table 1. List of bird species in winter on the coast of Rishiri Island.

科 Family	種 Species	学名 Scientific name	86~87	87~88	88~89	89~90
アビ	* オオハム	<i>Gavia arctica</i>	○	○	○	○
	* ハシジロアビ	<i>Gavia adamsii</i>			○	
カイツブリ	ハジロカイツブリ	<i>Podiceps nigricolis</i>		○		
	* ミミカイツブリ	<i>Podiceps auritus</i>	○	○	○	○
	* アカエリカイツブリ	<i>Podiceps grisegena</i>	○	○	○	
ウ	* ウミウ	<i>Phalacro coraxfilamentosus</i>	○	○	○	○
	* ヒメウ	<i>Phalacro Pelagicus</i>	○	○	○	○
ガン・カモ	スズガモ	<i>Aythya marila</i>		○		○
	* クロガモ	<i>Melanitta nigro</i>	○	○	○	
	ビロードキンクロ	<i>Melanitta fusca</i>	○			
	* シノリガモ	<i>Histrionicus histrionicus</i>	○	○	○	○
	* コオリガモ	<i>Clangula hyemalis</i>	○	○	○	○
	ホオジロガモ	<i>Bucephala clangula</i>	○	○	○	
	* ウミアイサ	<i>Merjus serrator</i>	○	○	○	○
ワシ・タカ	* オジロワシ	<i>Haliaeetus albicilla</i>	○	○	○	○
カモメ	ユリカモメ	<i>Larus saundersi</i>	○	○	○	○
	セグロカモメ	<i>Larus argentatus</i>	○	○	○	○
	* オオセグロカモメ	<i>Larus schistisagus</i>	○	○	○	○
	* ワシカモメ	<i>Larus glaucescens</i>	○	○	○	○
	* シロカモメ	<i>Larus hyperboreus</i>	○	○	○	○
	カモメ	<i>Larus canus</i>	○	○	○	○
	ウミネコ	<i>Larus crassirostris</i>	○	○	○	○
	ミツユビカモメ	<i>Larus tridactylus</i>				○
ウミスズメ	* ウミガラス	<i>Uria aalge</i>	○	○	○	○
	* ハシウトウミガラス	<i>Uria lomvia</i>	○	○	○	○
	* ケイマフリ	<i>Cephus carbo</i>	○			○
	* マダラウミスズメ	<i>Brachyramphus marmoratus</i>	○	○	○	
	* ウミスズメ	<i>Synthliboramphus antiquus</i>	○	○	○	○
	エトロフウミスズメ	<i>Aethia cristatella</i>	○		○	
	* コウミスズメ	<i>Aethia pusilla</i>	○	○	○	○
ヒタキ	* ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>		○		○
カラス	* ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	○	○	○	○
	* ハシウトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	○	○	○	○
科数	No of families 9					
種数	No of species 33					

注) \*: 越冬している種 Wintering species

表2. 海岸部における冬期の鳥類の個体数  
Table 2. Number of birds in winter on the coast

種 Species	学名 Scientific name	個体数 Number				平均値 mean
		'89. 12. 31	'90. 1. 2	'90. 1. 3	'90. 1. 4	
オオハム	<i>Gavia arctica</i>		1	2		1
ミミカイツブリ	<i>Podiceps auritus</i>	4		1		1.7
ウミウ	<i>Phalacro corax firamentasus</i>	5	2	9		5.3
ヒメウ	<i>Phalacro pelagicus</i>	680	871	766		772.3
スズカモ	<i>Aythya marila</i>			1		0.3
シノリガモ	<i>Histrionicus histrionicus</i>	213	145	268		208.7
コオリガモ	<i>Clangula hyemalis</i>	3	3	3		3
ウミアイサ	<i>Mergus serrator</i>	19	22	27		22.7
オジロワシ	<i>Haliaeetus albicilla</i>	2	2	2		2
オオセグロカモメ	<i>Larus schistisagus</i>				378	378
ワシカモメ	<i>Larus glaucescens</i>				16	16
シロカモメ	<i>Larus hyperboreas</i>				17	17
カモメ	<i>Larus canus</i>	2	2	2		2
ミツユビカモメ	<i>Larus crassirostris</i>	1	1	1		1
ウミガラス	<i>Uria aalge</i>		5	5		3.3
ハシブトウミガラス	<i>Uria lomvia</i>		11	9		6.7
ケイマフリ	<i>Cephus carbo</i>	1	1	1		1

の年によって変化していることが興味深い。また、観察時間に因るものと思われるが天候状態が良好であればほとんどが岩礁地帯に羽を休めており、海上に大群が観察されることは少なかった。

シノリガモは、利尻島で観察されるガン・カモ科の中では観察期間が長期にわたり、10月上旬には雄が繁殖羽に換羽するのが観察される。本種は個体数も多く、3回のセンサスにより最高268羽を記録した。1989年1月15日のガン・カモ類一斉調査時には全国合計数が1,147羽に対し利尻島では101羽となっており(日本野鳥の会1989)、9%を占めている。また、これまでの初認日が1987年で8月22日、1988年で8月7日、1989年で7月15日と年々早くなり、1989年では6月3日に最も渡去の遅い個体であるとも考えられるものが観察(西谷栄治 私信)されている。本種の道内における繁殖例は確認されていないが、天売島でも夏期の観察例があり(寺沢1986)、繁殖の可能性が示唆されている。初認の時期と繁殖可能な河川環境があることを考えると、利尻島においても繁殖の可能性のある種である。

この他の種では、いずれも個体数が少なくなるもののウミアイサ、ミミカイツブリは比較的観察は多く、個体数も上記3種以外では多い方である。特に、ウミアイサはシノリガモに次いで観察期

表3. 道北地域の海岸部でのガン・カモ類の個体数(1989. 1. 15)

Table 3. Number of geese and ducks on the coast of Northern Hokkaido (1989. 1. 15)

種 Species	学名 Scientific name	稚内	豊富	天塩	羽幌	枝幸	利尻
マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>			16			
スズガモ	<i>Aythya marila</i>				2		
クロガモ	<i>Melanitta nigro</i>	614			14		8
ビロードキンクロ	<i>Melanitta fusca</i>				2		
シノリガモ	<i>Histrionicus histrionicus</i>	155	1		9	19	101
コオリガモ	<i>Clangula hyemalis</i>	883			4	36	
ホオジロガモ	<i>Bucephala clangula</i>	55		6	2	5	
ウミアイサ	<i>Mergus serrator</i>	24		4	10	5	16
カワアイサ	<i>Mergus merganser</i>			13			
種数	No of species	9					
個体数	No of geese and ducks	2,004					

注) 本表は日本野鳥の会道北支部通信vol.13No.1から抜粋した。

間が長く10月上旬～翌5月上旬までであり、雄の繁殖羽を観察するのは10月下旬から11月上旬である。

また、オオハム(利尻島での観察が冬期間に限られ、シロエリオオハムとの識別が困難なため本論では、すべてオオハムとした。)・アカエリカイツブリ・クロガモ・コオリガモ・ウミガラス・ハシブトウミガラス・マドラウミスズメは観察例は多いものの個体数が少ない種である。これらの中で、アビ科、カイツブリ科、ウミスズメ科の種は、本来生息域が洋上であることから海岸近くでは少なくなっていると思われるが、ウミガラス2種は天候や海上の状況にかかわらず港内での観察も多く、利尻島ではハシブトウミガラスが多い。コオリガモ、クロガモは近接の稚内市で多いが(表3)、利尻島では少なくクロガモは特に観察地域も大部分が東部の二つ石地区に限られており、1989～1990年では1月末現在で観察されていない。

ウミスズメ科の中でウミスズメは観察例が多く、港内やその付近でも観察される。特に1989. 11. 1～23には20～30羽前後の群れ数群が岸近くで観察され、稚内港でも同時期に小群で観察された(日本野鳥の会道北支部1989)。しかし、これらは一時的であり、より北方で繁殖したものの南下群であることが考えられ、この他には岸近くで多くの個体を観察することは少ない。

カモメ科の種では、前述のオオセグロカモメを除きワシカモメ、シロカモメの2種が越冬種で、利尻島で繁殖する夏鳥のウミネコの他は渡り途中の観察がほとんどであり、個体数も多くはない。ワシカモメ、シロカモメはオオセグロカモメの群れに混成し、観察期間も10月上旬～翌5月上旬と長い。セグロカモメは、春秋の渡り期に多いものの、冬期では南下の遅い個体群が観察されるだけである。ユリカモメとミツユビカモメも春秋の渡り期に多く観察されるだけで冬期の観察はごく稀れである。特に、1989年12月31日～1990年1月14日に観察された個体は若鳥1羽であることから漂



行によるものと思われる。カモメは毎年少数が観察されるだけであるが、悪天候であった1988年12月4日にはオタドリ沼で100羽程の群れが観察されており、渡り期には多くの個体が洋上を通過しているものと思われる。

極めて観察が稀な種として、ハジジロアビ、ハジロカイツブリ、スズガモ、ホオジロガモ、ビロードキンクロ、エトロフウミスズメが挙げられるが、スズガモ、ホオジロガモの越冬期の観察は漂行に因るものであり、利尻島では渡り期における湖沼地帯での観察も少ない(小杉1989)。ビロードキンクロ、エトロフウミスズメはこれまでに1~2回しか観察されておらず、観察日も悪天候であったことから明らかに迷行に因るものと思われる。ハジジロアビは、前述したようにアビ科の特性で沿岸での観察が稀なだけであると思われる。また、ハジロカイツブリは1987年11月23日に本泊漁港で1羽が観察されただけの極めて稀な種である。

陸鳥の4種では、カラス2種が海岸に打ち上げられた雑多なものを採餌しているのが随所で観察されるが、夏期と同様でハシブトガラスが主であり、ハシボソガラスは少ない。オジロワシは、北部のポンモシリに毎年一つがいが、12月下旬~翌3月中旬まで観察され、同一個体であると考えられる。この個体の他にも不定期に海岸部一円の海上上空で観察されるが、これらの多くは亜成鳥である。ツグミは、通常旅鳥として春秋に大きな群れを観察するだけであるが、稀に越冬する年もあってそのような時には岸辺の岩に付いたイワノリを採餌しているのが海岸部で観察される。

利尻島海岸部の冬期に生息する鳥類のうち、海鳥は29種、陸鳥4種で海鳥の占める割合は88%で



写真3. 岩礁で羽を休めるウミウの若鳥



写真4. 港内で観察されたウミスズメの群れ



写真5. 利尻島で冬期に観察される鳥類のうち最も一般的なシノリガモ



写真6. 換羽中のオオハム

表 4. 生息環境別の出現状況

Table 4. The conditions of occurrence in different kinds of habitat.

種 Species	学名 Scientific name	港 Harbor	湾内 Bay	外海 Open sea	その他 Other
オオハム	<i>Gavia arctica</i>	100			
ミミカイツブリ	<i>Podiceps auritus</i>			100	
ウミウ	<i>Phalacro corax firmentasus</i>	19	19		62
ヒメウ	<i>Phalacro pelagicus</i>	0.1	3.9		96
スズガモ	<i>Aythya marila</i>	100			
シノリガモ	<i>Histrionicus histrionicus</i>	67	14	19	
コオリガモ	<i>Clangula hyemalis</i>	100			
ウミアイサ	<i>Mergus serrator</i>	26	37	37	
オジロワシ	<i>Haliaeetus albicilla</i>				100
オオセグロカモメ	<i>Larus schistisagus</i>	99		1	
ワシカモメ	<i>Larus glaucescens</i>	100			
シロカモメ	<i>Larus hyperboreas</i>	100			
カモメ	<i>Larus canus</i>	100			
ミツユビカモメ	<i>Larus crassirostrs</i>	100			
ウミガラス	<i>Uria aalge</i>	80		20	
ハシブトウミガラス	<i>Uria lomvia</i>	70	5	25	
ケイマフリ	<i>Cephus carbo</i>	100			

注) 出現率(%) frequency of occurrence =  $\frac{A}{B} \times 100$

A=各環境地における平均個体数 mean number of areas in each habitat

B=利尻島全体での平均個体数 mean number of all the Rishiri Island

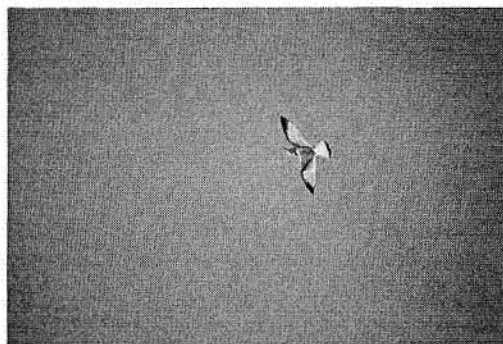
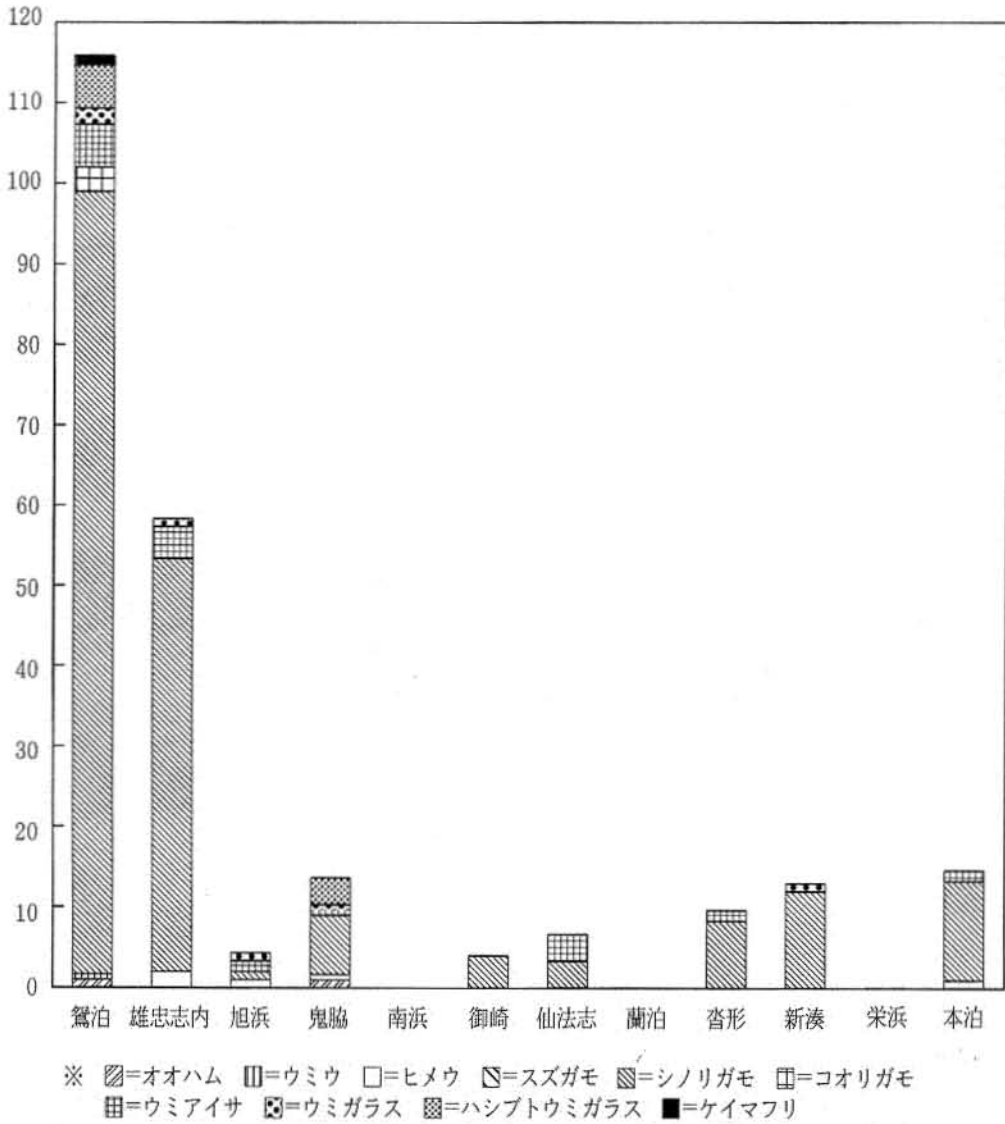


写真7. 港内で観察されたミツユビカモメの若鳥





注)本表は調査日のうち各港で最大数を記録した1990,1,3の数値を使用して作成した。

図2 利尻島の各港における鳥類の個体数

Fig.2.Number of birds in each harbor of Rishiri Island

ある。海鳥の中でも、カモメ科、ガン・カモ科、ウミスズメ科が種数では多いが、その半数近くが渡り途中の観察であることと、ウミスズメ科のほとんどが利尻島近海の洋上で周年生息していることを考え併せると、冬期に渡来する種ではガン・カモ科の海ガモ類が多いと言える。また、越冬する種は海鳥で19種、陸鳥4種で全体の70%である。

鳥類の分布については、大部分の種が島内一円に生息しているが、環境毎の場合港内での観察が多い(表4)。しかし、この傾向は厳冬期に限られ、2月下旬以降の寒気が緩む時期には港内での観察は少なくなってくる。また、厳冬期でも天候状態が良好で海上が非常に穏やかな時には外海に出ていることもある。これは、冬期間の北西の季節風と荒波を避けられることや、採餌が容易であることに因るものと考えられる。特に、利尻島で最も規模の大きい港である北部の鴛泊港では、1990年1月3日の調査時に8種113羽を数えており(図2)、港の規模が大きくなるにしたがって種数・個体数が増加する傾向にあることが伺える。そして、同規模の港であれば魚類等を廃棄する漁船等が多くなるに従って種数や個体数が増加する傾向にあるのではないだろうか。また、港以外の環境では、観察される海鳥類の個体数に著しく変化はないものの、湾内地形の海岸部では比較的観察例が多く、砂浜の海岸部では観察例は少ない。

この他、アビ科のアビや海ワシ類のオオワシ等、北方の海岸部であれば観察の可能性がある種が、1986年以前は不明なもの利尻島では観察されていない。猛禽類の観察例が少ないことはオジロワシの個体数が少ないことも含めて利尻島では四季を通じて同様であり(小杉1988)、これが冬期の鳥類相の特色と安易に考えることはできないが、興味深いことである。

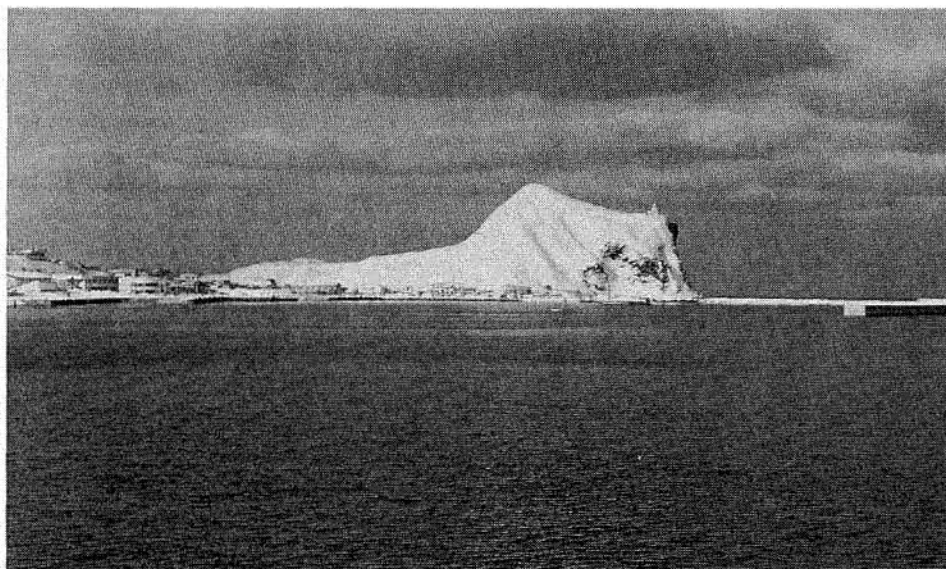


写真9. 利尻島で最も規模の大きい鴛泊港

## おわりに

以上のように、観察が4年間の短期間であったために、その年によって渡来数が増減したり、渡来が不規則であるなどの鳥類相の変化を十分に捉え切れずに不十分な報告となったが、今後も更に長期的な観察と密度の濃い調査を継続して行きたいと考えている。とりわけ、季節的な変化が大きく今後の課題である。

また、渡来状況の変化と併せて、生息環境が良いのではと思いがちである海岸部でも、実際にはオオセグロカモメやアカエリカイツブリなどの嘴や足に漁網やテグスが絡まっているのが観察されており、人的被害を受けていることから今後も良好な環境の保全が必要である。

小杉和樹 日本野鳥の会道北支部会員

## 引用文献

小杉和樹 1988：「利尻島の鳥」利尻町立博物館年報 No.7：43～54

西谷栄治 小杉和樹 1988：「ウミネコのコロニーについて」日本野鳥の会道北支部報告

No.2：12～18

日本野鳥の会 1989：「ガン・カモ・ハクチョウ類の渡来地」野鳥 No.520：36～38

寺沢孝毅 1986：「天売島の鳥」

小杉和樹 1989：「オタドマリ沼の鳥」利尻町立博物館年報 No.8：47～60

日本野鳥の会道北支部 1989：「日本野鳥の会道北支部通信 Vo113. No.6」

Winter avifauna on the coast of Rishiri Island

Kazuki Kosugi